2019年8月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第511号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

『ところで軍国少女はどこへ行った』の刊行によせて

元・軍国少女のことばが、記憶と現在を見事に結び付け、戦時教育の"危うさ"を現代社会に問う ///★///

文・ななみ書房　長渡　晃

著者・本田和子（ほんだ　ますこ）は、お茶の水女子大学初代女性学長で児童学・文化史研究者である。1931年、満州事変が生起し、社会がきな臭い方向へ進みだした年、新潟県高田に生まれた。やがて日本は太平洋戦争へと巻き込まれてゆく。自他共に認める真面目で優秀な少女であった著者は、国民学校や女学校でこの戦いは正義のための聖戦であり神州は不滅との教師の言葉を素直に受け止めた。天皇の赤子であることを本気で信じたわけではないが、納得して従った。

優等生の女の子

女学校の入学試験が、すべて口述試験に代わった。また、体育競技も入試科目となり、「走る・投げる・重量を運ぶ・鉄棒の実技」などが採点科目となった。

体力に自信のなかった著者は、「やれやれ」と思ったが、その理由を問いただすことはしなかった。どうせ、「日本は体の強い子どもを育てようとしている」式の答えが得られるだけと思ったし、そう決まったなら「致し方ない」と思っていた。当時の少女たちは、「問いただす」という行動を知らなかったといってよい。決まったことは、「守る」「従う」という行動様式を、いつか身につけてしまっていたからである。

教科の中に、「武道」が加わったことも、戦時体制下中等教育の目標の1つだった。しかし、彼女たちは、週1回通ってくる薙刀師範の指導によって薙刀の訓練を受けていた。薙刀にも、

【ところで軍国少女はどこへ行った】本田和子著・ななみ書房刊／2019年4月発行・ISBN978-4-903355-83-2・税込価格1,296円

様々な流派があるらしいと知ったのは、1人の生徒と、薙刀師範との問答だった。華道の『池之坊』とか『京古流』と同じようだなと思い、薙刀も「相手を殺す術」というよりは、「型」として覚えた。短か目の、ただし、1年生には長い薙刀を、「イエーイ」とか掛け声をかけながら振り回した。

体育の授業の中には、「防火訓練」が入りこんできた。焼夷弾が落ちたら先ずむしろをかぶせる。その上に水をかける、という次第で、「むしろかけ」やら「バケツリレー」の訓練をさせられた。「焼夷弾落下」と誰かが叫ぶと、彼女たちは「むしろ」を顔の前まで持ち上げて走った。とにかく、落ちている筈の焼夷弾にむしろをかぶせないといけないからだ。

でも、あちらにもこちらにも焼夷弾が落ちたら、「むしろかけ」や「バケツリレー」はどうすればいいのかなどと、一寸不思議に思ったりしながら、それでも彼女たちは懸命にむしろを掲げて走り、バケツリレーをした。

「武道」も「防火訓練」も、彼女たちは真面目にやっていたけれども、「型」だけを学び、「型」だけを実行していた。アメリカの飛行機B29が、彼女たちの頭上を飛び廻り、街中に焼夷弾を落としていくなどとは、本気で考えていなかったのである。

日々の日課のように訓練させられたのは、分列行進であった。昼休みが終ると、上級学年だけが校庭に集められ、学級の級長などのリーダー格の子どもが、「分列に前へ進め」と号令をかける。それに従って、生徒たちは手を振り足を上げて行進した。校庭を1周するとき、校長や教頭の前を通る。そのときは、「校長先生にカシラーミギッ」と号令がかかり、一斉にその教師の立ち位置に顔を向けるのだった。

「小学校」が「国民学校」と名称を変え、「武道」や「分列行進」をくり返す。これらが、戦争遂行とどんな関係があるというのか。何を目標としてこんな訓練を毎日毎日行うのか。誰も説明してくれなかったし、彼女たちも問いただすということをしなかった。そもそも「問いただす」という言動を、彼女たちは「知らなかった」と言うべきかも知れない。

ただ、ここで、きびしくしつけられたのは「決められたこと」は、「きちんと守る」ということだった。彼女たちは、国民学校の生徒なんだから、教えられたこと、決められたことは、よりよく実行すべきである。優等生である著者にとって、このことは、その意味を考えるより「正しく守る」こと以外になかった。

憧れのセーラー服の代わりに、野暮ったい全国一斉の制服を着てテクテクと歩いて通い、薙刀を振ったり、バケツリレーをしたりして、彼女たちの女学校生活は始まったのだった。誰に命じられたわけでもなく、ただ、この頃の女学生たちは、「疑問に思うことを問いただす」とか、「教えられることに異議を唱える」とかいう言動は、視野に入っていなかったのである。

彼女たちは、低学年であったから、工場動員は免れた。その代わり、校庭に薩摩芋を植えたり、人手不足の農家に農作業の手伝いに行かされたりした。その頃歌われた『学徒動員の歌』、すなわち、「君は鍬取れ、俺は銃、戦さの道に二つなし」という戦時歌謡さながらであった。こんな歌に励まされ、お米や野菜を作ることは重要だと思っていたから、とにかく真面目に働いた。何しろ、この戦いは正しく、神州は不滅であると教え込まれていたから、どんなに敗け戦さが続いても、日本が敗けるなどとは考えもしなかったのである。

こうした「戦争観」の中で、彼女たちは「少国民」となり、「軍国少女」へと成長した。こうした「日本観」は、「皇国史観」に基づく「日本国史」の授業でも、しっかりと形成されていった。それに、勇壮で覚えやすい戦時歌謡は、少女たちの心を揺さぶり、「正義のための聖なる戦い」を疑うこともなかったのである。

いま、語ってみよう

著者が「国民国史」と「戦時歌謡」を取り上げて、「私」自身を語ってみようと考えたのは、こうした所似に他ならない。そして、このことは、「私」という1人の子どもの物語でありつつも、あの時代を生きた同世代の女性たちにとっても、共有される物語に他ならないと思ったからだ。

顧みれば、著者を軍国少女に仕立てたのは教育の力であり、何より心を揺さぶられ、力を得たのが勇壮な戦時歌謡であった。高級将校の父につながる『愛馬行進曲』、今でも歌える『広瀬中佐』、心を深く捉えた『サイパン殉国の歌』。戦争体験の多くが戦時歌謡に負うものであった。そしてやがて1945年の8月15日（敗戦の日）を迎えるのである。子ども時代「戦争」というパートナーとともにあり続けたという著者が、戦後、「何のこだわりもなくアメリカ文化の中にすっぽりとはまっていた」。あれほど戦前の教育に「一直線」だった「軍国少女」がである。

人生の終焉に近づきつつある今、自らの歩みを振り返り「子どもは教育を通じて一定の方向に形作られやすい」ものであり、大人の責任の重さを語っておきたかったという。著者は、自叙伝風のものを文章化することは好まなかったという。「生い立ちの記」などは、決して本にすまいと思い定めていたのである。しかし、今、何故か、それを掘り起こしてみようと思った。たった一人の「私」、しかも、必ずしも標準的とは言い難い女の子だった「私」の「体験を語ること」、そんな営みに何かしらの意味があろうとも思えないのに、にもかわらず、なのである。

写真家・森山大道は「写真は、記憶と現在のゆくりなき邂逅である」と言った。

戦争の記録を残すおびただしい数の写真がある。しかし、戦争を知らない者にはその体験がないことゆえに過去の写真から呼び起こされる記憶はない。

一方で元・軍国少女のことばは、記憶と現在を見事に結び付け、戦争と少女の心とを貫いた戦時教育の危うさを現代社会に問いかけている。

＊

（ながと　あきら／ななみ書房代表取締役）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

この「新刊ダイジェスト」のバックナンバーを弊社Ｗｅｂサイトにたくさん掲載してます。機会がございましたらぜひご覧ください。アドレスは以下の通りです。右のＱＲコードもご利用ください。　http://neil.chips.jp/chihosho/digest/index.html

『日本統治下の朝鮮シネマ群像　－戦争と近代の同時代史』●下川正晴著

近年、日本統治下のソウルで制作された朝鮮映画フィルムが、北京・中国電影資料館などで相次いで見つかり、記録された生々しい朝鮮社会と人々の姿が、日韓の研究者に衝撃を与えているという。『青い山脈』や『ひめゆりの塔』で戦後のヒューマニズムを代表する監督と称される今井正の『望楼の決死隊』もその一作で、国境警備駐在所夫人役の原節子がモーゼル銃で朝鮮独立運動のゲリラを撃退するシーンが描かれる。今井は何故国策映画に与したのか、どのような思いであったのか。「自分の犯した誤りの中でいちばん大きい」との言葉も紹介する。巻末に、詳細な年表「朝鮮シネマの社会文化史　1935～1945」と「朝鮮シネマ人物事典」が掲載され、国策映画の全貌が俯瞰できる。日韓関係が悪化する今日、日朝映画人の軌跡を追い、映画という視点から植民地朝鮮の真相に迫ろうとするものである。発掘された映画の多くは韓国映像資料院発刊のＤＶＤ選集で観ることができる。

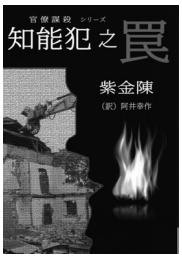
◆ 2,376円・四六判・325頁・**弦書房**・福岡・20190530刊・ISBN9784863291881

『明智光秀と近江・丹波　－分国支配から「本能寺の変」へ』●福島克彦著

明智光秀がなぜ信長を殺害したのか。古来よりさまざまな説が唱えられてきた。古くは怨恨説、野望説など光秀個人の心情に起因するものが大半を占めていたが、近年では足利義昭や朝廷らが関与した黒幕説、さらには四国政策説などが主流となりつつある。まさしく百花繚乱の様相を呈する。坂本竜馬暗殺と同様、歴史ファンならずとも日本人の誰もが関心を抱く歴史的事件だといえるだろう。だが、信長殺害の動機解明に躍起になるあまり、ともすると光秀の戦国武将としての評価が見落としがちになる。これは光秀にとっても不本意であろうし、何より歴史的本質を歪めてしまう恐れもある。信憑性のある史料に依拠しながら戦国武将としての光秀がいかにして分国支配を行ったか。それが本書の一貫したテーマである。近江や丹波攻略の際の国人（国衆）との駆け引きなどを見ていくと、秀吉流のしたたかさをも兼ね備えた、従来のイメージとは異なる新たな光秀像が浮かび上がる。

◆ 1,620円・四六判・184頁・**サンライズ出版**・滋賀・20190611刊・ISBN9784883251957

『知能犯之罠』●紫金陳著／阿井幸作訳

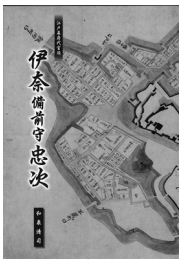


日本で知られている中国のミステリー作家はまだ少ないが、息をつかせぬ展開でミステリーの醍醐味を味わわせてくれるのが本書である。舞台は中国の架空の県、白象県。公安局副局長が車中で心臓をひと突きされた死体で発見される。防犯カメラの映像からすぐに事件は解決すると思いきや、手掛かりは得られず、そんな警察を嘲笑うかのごとく、第二、第三の殺人が起き、失踪者も出る。捜査に行き詰まった指揮官の高棟は旧友で、犯罪心理学を学び、頭脳明晰でアメリカで銀行の幹部として活躍する徐策に協力を仰ぐが、実は徐策こそが犯人であった。防犯カメラ頼りの捜査を逆手に取り、綿密な計画殺人を遂行する徐策だが、ついに高棟は彼の犯行に気づく。

しかし、恐るべき計画は想像を超えた結末を迎える。至るところに張られた伏線、さらに保身のみに縛られる警察や、あらゆるコネを犯行に利用する犯人など、現代中国の姿も描かれ、極上の倒叙ミステリーが楽しめる。

◆ 1,998円・B6判・361頁・**行舟文化**・福岡・20190531刊・ISBN9784909735027

『江戸幕府代官頭　伊奈備前守忠次』●和泉清司著



徳川家康の関東入国にあたって、領国形成と生産力の把握、新田開発等を実務面から支えた伊奈備前守忠次については、その有能さを示すエピソードがいくつか伝わっている。秀吉から「もし自分の家臣になるならば、すぐさま一万石を与えよう」と誘われたが固辞した、などというのもその一つ。忠次は、その陣屋を構えたとされる現在の埼玉県北足立郡伊奈町を中心とした地域では、利根川東遷等の河川改修や土木治水によって地域の基礎を築き、「備前掘」や「備前堤」といった川名地名にその名残を留める地元の偉人である。忠次の生涯を史料を基に描く本書を読むと、そんな江戸初期の関東地域での仕事が実のところ忠次の事績のほんの一部でしかないことがわかる。興味深いのは、三河の一向一揆の後、家康の元を一度離れることになった若き忠次が諸国を流浪し、この時期に土木技術等を身に付けたらしいとされているところだ。詳細は不明ながら忠次はこの時期いったい誰の元でどのように学んだのか、想像を掻き立てられるところである。

◆ 2,700円・四六判・319頁・**埼玉新聞社**・埼玉・20190524刊・ISBN9784878894985

『北京１９９８　中国国外退去始末記』●中津幸久著

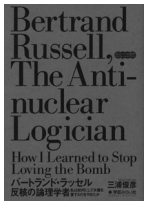
1998年ひとりの日本人新聞記者が、中国政府から国外退去と5年間の入国禁止を言い渡されました。本書はその当事者となった記者の手による当時の記録です。突然の拘束から連行、そして長時間の取調べ。国家の機密を暴露したという自らの記事を示され、取材源を自供するよう求められます。しかし著者は取材源の秘匿という原則を守り通し、ついに上記の処分となったのでした。著者の推測では、取材源である人物に不利な証言をすることを求められたのだろうとのこと。手練手管を駆使して不都合な情報を統制しようとしているのがわかります。そして2017年に久しぶりに中国を訪れた印象からは、統制は決して緩んではいないとも感じています。もちろん著者以外のマスメディアも色々な制約を受けながら中国で取材を続けてきました。そうした歴史についても触れられています。私たちが受け取る中国からのニュースが、一筋縄で送り出せるわけではないことを痛感させられます。

◆ 1,620円・四六判・296頁・**中国書店（集広舎）**・福岡・20190604刊・ISBN9784904213742

売行良好書　期間：2019年6月15日～7月14日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1,620円・書肆侃侃房　(2)『産業遺産巡礼　日本編』2,376円・弦書房　(3)『バートランド・ラッセル　反核の論理学者』2,808円・学芸みらい社　(4)『明智光秀と近江・丹波』1,620円・サンライズ出版　(5)『よみきかせのきほん』810円・東京子ども図書館　(6)『中学生のためのスイーツの教科書』972円・吉備人出版　(7)『お寺参りが楽しくなる　奈良百寺巡礼』1,058円・京阪奈情報教育出版　(8)『不登校は1日3分の働きかけで99%解決する』864円・リーブル出版　(9)『食は薬なり』1,296円・金壽堂出版　(10)『中国情報ハンドブック　2019年版』3,240円・蒼蒼社　(11)『下戸の夜』1,728円・本の雑誌社　(12)『図説17都県放射能測定マップ＋読み解き集』2,500円・みんなのデータサイト出版



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1620円・書肆侃侃房　(2)『東京かわら版　7月号』600円・東京かわら版　(3)『下戸の夜』1728円・本の雑誌社　(4)『本の雑誌　434号』840円・本の雑誌社　(5)『小鳥たち』2376円・2376円　(6)『昭和プロレスマガジン　49』1000円・昭和プロレス研究室　(7)『明智光秀と近江・丹波』1620円・サンライズ出版　(8)『DCプランナー2級合格対策テキスト　2019年度版』2700円・経営企画出版　(9)『DCプランナー2級合格対策問題集　2019年度版』2700円・経営企画出版　(10)『教養の場としての英文読解』2700円・ふみくら書房

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本一センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『歌集　砂丘律』1512円・青磁社　(2)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1620円・書肆侃侃房　(3)『東京の森のカフェ』1404円・書肆侃侃房　(4)『北海道大学もうひとつのキャンパスマップ』1728円・寿郎社　(5)『宗教社会学論集　第1巻　上』5832円・北海道大学出版会　(6)『映画にみる韓国と日本』734円・弦書房　(7)『江戸幕府代官頭　伊奈備前守忠次』2700円・埼玉新聞社　(8)『新装版 奥武蔵登山詳細図 全130コース』972円・吉備人出版　(9)『不登校は1日3分の働きかけで99%解決する』864円・リーブル出版　(10)『ロマンスという言語』4860円・大阪公立大学共同出版会　(11)『出雲王国とヤマト政権』2430円・大元出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼季節にふさわしい雑誌特集記事をふたつ。

【あおもり草子258号】本体価格556円／企画集団プリズム発行

特集：津軽ゆうれい談（ばなし）「弘前は幽霊の街と呼べるほど数多くの幽霊画が残されている。久渡寺、宗徳寺、正伝寺が所属する珍しい幽霊画を掲載するとともに、毎年、ギャラリー森山で行われる「ゆうれい展」を特集。弘前の「お化けを守る会」や、ねぷたの送り絵と幽霊の関係についても紹介。」不思議な怪物の話『谷の響』 佐藤きむ／久渡寺の幽霊　菊池正浩／宗徳寺の幽霊　黒瀧信行／ギャラリー森山所蔵　幽霊画／弘前【お化けを守る会】／ねぶたの送り絵は魔祓いの願いを込めて描かれる

＊

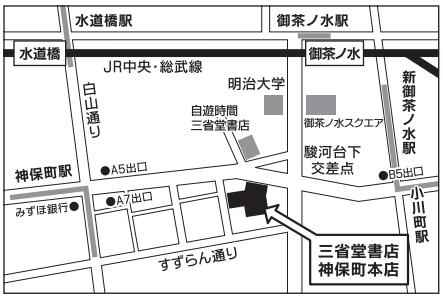
【子どもの文化 2019年6月号 VOL.578】本体価格290円／子どもの文化研究所発行　**特集：学校におばけはもういない？**

「2015年6月13日土曜日夕刊の京都新聞に〈今よみがえる学校の怪談〉という特集記事が掲載されました。学校の怪談は、1990年代多くの学校でささやかれていましたが、現代ではどうだろうか？という問題意識で取材された記事でした。時代の変化とともに、綺麗に建て替えられた校舎で本当に怪談はささやかれなくなったのでしょうか？それは学校が子どもの生活の場所として、大きく変化してしまったから？様々な観点から、学校の怪談について考えます。〈学校の怪談〉ブームの火付け役、ポプラ社シリーズ『学校の怪談』編集委員の米屋さんや飯倉先生の日本独自の文化風土だという〈学校の怪談〉の論考などそのルーツと文化を考える1冊になりました。ぜひお読みください。」

『現代民話考』から『学校の怪談』まで米屋陽一／『学校の怪談』はあたりまえじゃない―『現代台湾譚―海を渡った「学校の怪談」』から考える―飯倉義之／カムヒア！　学校の怪談　ワニザメ党／学校の怪談は今語られているのか？　堀田穣

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO　営業のごあんない

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。